

趙明誠『金石錄』の歐陽脩『集古錄』引用に見る撰述態度

——書法に關する記事を中心として——

大 森 信 徳

(一)

趙明誠（一〇八二—一一二九）、字は德父（德甫とも德夫とも記す）、密州諸城（現在の山東省諸城縣）人であり女性詞人として名高い李清照の夫としても知られる。若くして太學生となり、蔭官によつて官界に入つた。崇寧四年（一一〇五）に鴻臚少卿に任じられ、大觀二年（一一〇八）に妻とともに青州の故居に歸り、金石遺文の蒐集にとめた。建炎三年（一一二九）に知湖州に任じられたが、赴任せぬうちに建康で没した。

趙明誠の著した『金石錄』は三十卷からなり、前十卷は先秦から北宋に至る銘文石刻二千點をすべて時代順に配列した目録である。『集古錄』が四百餘りであるのに比し、その數は數倍にのぼる。碑刻の目録の多くは碑文の撰者、揮毫者および

立碑年月が注記され、後二十卷はそれらに弁證を加えた題跋五百二條からなり、作者の多年にわたる蒐集と研究によつて得られた成果が集められている。

このような本格的な金石研究の專著を生み出した嚆矢として忘れてはならないのが、歐陽脩の著した『集古錄』である。そこには古文への復興を呼びかける文學改革運動の提唱者であつたことに言い及ぶまでもなく、名筆家としての文章の牙え、『新唐書』『五代史』の撰者でもある歴史家としての鋭い目が反映されていると思われる。それが範となり、後世益々盛んになる金石法帖の題跋の先鞭をつけた意義には淺からぬものがある。

『集古錄』の採録碑刻の總數について、現行の『歐陽文忠公集』（四部叢刊本）の「跋尾」では四百二十跋あり、行素艸堂

刊の「跋尾」では四百二十二跋を収める。歐陽脩の子の斐は二百九十六と言ひ（『集古録目』序文の「録目記」）、陳振孫は三百五十餘跋と言ふなど（『直齋書畫解題』卷八）、テキストにより一致せず、いずれが正しいのか判然としない。

念のために『集古録』について附言しておく、該書は夏・殷・周の三代から五代に至るまでの金石の拓本を集成したもので一千卷あつたが（『歐陽文忠公集』卷四四「六一居士傳」）、現在は佚して傳わらない。熙寧二年（一〇六九）子の斐に命じて作らせた『集古録目』十卷は、いわばその總目錄にあたり、跋文ごとに碑文の揮毫者、撰者、官位略歴、立碑年月などを書きつけたものである。その『跋尾』は歐陽脩がコレクシヨンのなかで興味を引く事柄に關し各々批評を加えたものである。

『金石録』序にも趙明誠自らが、

後得歐陽文忠公集古録、讀而賢之、以爲是正僞謬、有功於後學甚大。

と言うように、考證を進めるうえで信頼できる資料として『集古録』跋尾の記述に據るところが少なくない。それに言及す

趙明誠『金石録』の歐陽脩『集古録』引用に見る撰述態度（大森）

る場合には、歐陽文忠公云々と記されるところが若干あるものの、大部分は書名を明示したうえで引用している（『金石録』本文において『集古録』云々とあるのは、嚴密に言えば、その跋尾の文章を言う。以下本稿では逐一注記しない）。これより、趙明誠は執筆に際し『集古録』をいかに意識に上らせていたかがうかがい知れる。

かく言うものの、『金石録』がけつして『集古録』の體裁から内容に至るまでのすべてを無批判に受け入れていたわけではない。その實、引用文献のなかでも『集古録』に關する補正が最も多いことについては、すでに指摘されるところとなつてゐる。これは『金石録』が『集古録』の單なる二番煎じにおわるのではなく、何らかの新生面を開かんとする撰者自身の積極的な意圖がそこから汲み取られる。

南宋の朱熹は「家藏石刻序」（『晦菴先生朱文公文集』卷七五）に次のように述べる。

觀之大略如歐陽子書、然詮序益條理、考證益精博、予心亦益好之。

具體的には、『金石録』跋尾が『集古録』とは異なり、金石遺

文の取得順ではなく時代順に排列したことや（ただし、『集古録』の通行本は時代順に排列されている）、多くの資料を用いて博引傍證するなど、實物を目睹することで培われた高い見識が隨所に見られることをかく言うのであろう。『金石録』を『集古録』より高く評價していることは明らかである。

『金石録』は、金石研究の資料として用いられる性格上、これまで本書自體を研究対象とした論考は管見によれば見当たらない。本稿では、『集古録』本文の引用を通じて、趙明誠が『集古録』を如何に捉えていたかという撰述姿勢について、書法に關する記事を中心として、いささかの考察を加えたいと思う。本稿ではテキストとして清の乾隆壬午年（一七六二）に刻された雅雨堂本を底本とする金文明校證『金石録校證』（廣西師範大學出版社・二〇〇五年）を使用する。なお、金文の解釋及び考證の内容そのものに對して、その是非を問うものではないことをあらかじめ斷つておく。

(一)

周知のごとく、『集古録』や『金石録』が單なる偶然によつて生まれたものではなく、この時代に士大夫層において書畫金石を私藏する風潮が盛んになったことと無縁ではない。

たとえば、朱熹は若い頃から金石文字を好んでいたが、家が貧しかったためにその拓本を手に入れることができず、『集古録』を時折手に取り、その序跋や弁證の文章を読むことを樂しみとしていた。意にかなえば、さながら手ずからその金石を撫でて文字を見ているかのようにうっとりとし、心がふさいだ時には、自らの貧しさを恨み、心は遠く離れ、歐陽脩が行つたように得たいと思う欲求を満足させることができず、終日不愉快に過ごすこともあつた。⁽³⁾

趙明誠の妻である李清照が記した『金石録』後序には、夫妻の書畫骨董への熱の入れぶりが活寫されている。開封の相國寺に市が立てば掘り出し物を搜しに出かけ、衣服を質入してまで手に入れた。書畫や彝鼎を得れば、撫でさすつたり廣げたり巻き納めたりして瑕を檢査し、一晚に蠟燭一本が燃え盡さるのがならいであつたことなどが記されている。⁽⁴⁾

以上より當時の文人たちが、いかに情熱をそれらに傾けていたかがわかる。それでは、趙明誠がいかなる動機にもとづいて『金石録』を著さんとしたのだろうか。趙明誠自身が記した序文に次のように言う。

若夫歲月、地理、官爵、世次、以金石刻考之、其抵牾十

常三四。蓋史牒出于後人之手、不能無失、而刻詞當時所立、可信不疑。

金石碑刻によつて從來の史書の誤りを正さんとする意圖にもとづいて編纂した次第を述べている。しかし、このような視點は何も趙明誠ひとり唱えたものではなく、それに先んじる『集古錄』序に、

因並載夫可與、史傳正其闕謬者、以傳後學、庶益於多聞。

とあり、呂大臨『考古圖』記にも、

或深其制作之原、以補經傳之缺亡、正諸儒之謬誤。

と同様の主旨が述べられ、當時の人々が、生き證人としての金石遺文を如何に重視していたかを窺い知ることができる。

また趙明誠は、その動機がたんなる趣味娛樂から發せられたものでないことを強調する。彼自身による序には、

餘之致力於斯、可謂勤且久矣、非特區區爲玩好之具而已、

趙明誠『金石錄』の歐陽脩『集古錄』引用に見る撰述態度（大森）

也。

とあり、長期にわたり力を傾けてきたのも、たんなる手すきびの道具ではないことを主張している。政和七年（一一一七）九月十日に劉跂が記した『金石錄』後序にも、

好古之士忘寢食而求、常恨不廣、亦豈專以爲玩哉。

とあり、同じ主旨を述べる。穿鑿すれば、これは歐陽脩「集古錄目序」に、

或譏予曰、物多則其勢難聚、聚久而無不散、何必區區于是哉。予對曰、足吾所好玩、而老焉可也。

とあるのを意識したものではないか。

物の數が多くなれば、おのずと蒐集が難しくなり、蒐集したものが時が経れば散佚してしまうものであるのに、どうしてこせこせと心を勞しているのか、とある者に問われると、古物の玩弄に満足しつつ老いてゆけば、それでよいのである、と歐陽脩は答える。『新唐書』『五代史』を著した歐陽脩の歴

史家としての側面を想い致せば、彼が書畫金石の蒐集や考證をまつたくの趣味娛樂に準ずるものとして看做していたとは考えにくい。この序を見る限りにおいては、「樂しむ」ことを目的とした歐陽脩の金石に對する姿勢がはつきりと表明されており、趙明誠のそれとは相反するものであることがわかる。また、このような歐陽脩の姿勢が彼の書法觀と通底している點についても注目されるべきであろう。⁵⁵

上述したように、金石學興隆の氣風のもと、宋代にはこの方面の專著が陸續と現れ、金石研究が獨立した専門の學問となつた。それに伴い書物の體裁も多様化されるに至る。王國維の分類によれば、呂大臨『考古圖』『宣和博古圖』のような古器の形狀のみならず款識も模寫したものが一類。王俅『嘯堂集古錄』薛尚功『歷代鐘鼎彝器款式法帖』のように文を録することを主とし圖譜を以つて書名としないものが二類。歐陽脩『集古錄跋尾』趙明誠『金石錄』張綸『紹興內府古器評』董道『廣川書跋』黃伯思『東觀餘論』のように圖譜とは關わりなく目錄の作成に精力を傾けたものを三類としている。

しかしながら『集古錄』は當初から上に分類されるがごく純粹な目錄として著されたわけではなかつたようである。これに關して小林義廣氏は、「取得した順序に従つて碑文の拓

本ごとと一卷とし、拓本の後には碑文を利用して考證した跋文（集古錄跋尾）が続く。現存する集古錄跋尾の各文章の多くが『右』で始まつているのはその名残であろう」と指摘する。⁵⁶『金石錄』はこれを形式的に襲い、跋尾の全文が「右」で書き始められていることも、『集古錄』に對する意識のほどの一端を窺うことができる。

また、『集古錄』跋尾には書法における審美的視點から論じられることが少なくない。例えば、

右安公美政頌、房璘妻高氏書。安公者名庭堅、其事蹟非奇、而文辭亦匪佳作、惟其筆畫適麗、不類婦人所書。餘所集錄亦已博矣。而婦人之筆著於金石者、高氏一人而已。（『歐文集』集古錄跋尾五）

とあり、集古錄に收める金文石刻は多くとも、女性の筆になるものは高氏一人のみであると言う。文章は佳作といえるものではないが、その書法が適麗であり婦人の書とは思えない點から、採録を決意したと述べる。

それとは反し、『金石錄』ではかかる視點から論じられることはなく、文字の誤認や異同の指摘、あるいは立碑年月や撰

者を特定する必要性から書法的立場にもとづいて書蹟を問わねばならない場合にも、なるたけ客観的であろうとする態度が窺われる。このことは趙明誠自身の序に、

至于文辭之美惡、字畫之工拙、覽者當自得之、皆不復論。

とあり、書法の審美の如何については讀者に委ね、本書では改めて論じないと述べていることから、歐陽脩と立場を異にしていることを示している。

以上の具體的な用例を通じて、趙明誠は歐陽脩の見解をただ押し戴いていたわけではなく、従うべきところは従い、自らは是とするところはそれに據ろうとする、彼自身の確たる姿勢が明らかになったであろう。

(三)

『金石錄』跋尾を仔細に見ると、ひたすら金石遺文の考證に字句を費やしているばかりではなく、時おり趙明誠の感情を伴った生の聲が文章の端々に散見する。

たとえば、「唐景陽井銘」（卷二六）について、歐陽脩は、

煬帝躬自滅陳、目見叔寶事、又嘗自銘以爲戒如此、及身爲淫亂則又過之、豈所謂下愚不移者哉。

と、煬帝自らも身を持ち崩したことについて、『論語』陽貨第一七にある「子曰わく、唯だ上知と下愚とは移らず」を引いて、最上の知者と最下の愚者という二種類の人間は相容れない。つまり、決定的な悪人と善人が存在することを言うのである。

それについて趙明誠は、

餘以爲煬帝躬賊其父而奪之位、其凶忍狂悖、人神之所憤疾、死蓋晚矣。至于長惡不悛、以亡其國、乃所當然、又何足議焉。

と、煬帝が、自らが陳を滅ぼした事、後主陳叔寶が張貴妃とともに井戸に身を投げた事跡などを銘文に記し自戒としたことを述べる。かかる事跡については『陳書』卷七の張貴妃傳に詳しい。そのあらまは次の通りである。

張貴妃は名を麗華といい、才知に富み容色端麗であり、しきりに賓客との遊宴にふけた。また厭魅の術を好み、鬼道

をもつて後主を惑わせ淫祀を宮中に置き、諸巫をあつめて舞させた。政治のことも彼女は一言一事の全てを知り後主に傳え、ますます重用されるに至る。隋軍の進攻によつて臺城が陥落するに及んで、張貴妃は後主とともに井戸に身を投じたが、隋軍に引き出されて晉王楊廣すなわち煬帝に斬殺される。

趙明誠は、煬帝自らも父の文帝を暗殺して帝位を奪い、惡逆無道によつて國を滅ぼしたことは當然の道理であり論議するまでもないと言う。煬帝は「亡國の天子」と稱される陳後主を自らの鑑戒としながらも、結局は同じ轍を踏むことになつてしまつたのである。これについて、碑文の考證とは全く關係なく、道德的見地に立つた主觀的な所感が述べられている。

また、「韓退之題名二」（卷二九）には「大顛に與うるの書」（『韓昌黎先生外集』卷二）に言及して次のように述べる。

世間又有退之與大顛書、乃國初一學佛者僞作、而歐陽公集古錄以爲非僞。永叔平生爲文、宗師退之、且力詆釋氏、而獨信此書、何邪。

世間には韓愈の「大顛に與うるの書」があるが、これは國初の一佛學者の僞作であるとする。この大顛という人物は、

晩年に彼と交流のあつた僧侶である。憲宗の治世に「論佛骨表」を奉り潮州に左遷されたように、佛教の排斥を己の任としていたかのようにさえ見える韓愈に對して、世間では佛教を好まぬイメージが濃厚であつたに違いない。それが僞作説を生み出す大きな要因の一つになつたのではないかと想像される。

しかし、歐陽脩は『集古錄』に「僞に非ず」と、それが韓愈の揮毫になるものとして論斷する。これについて趙明誠は、彼が平素文章を作るうえで韓愈を模範とし、かつ佛教をつとめて非難しているにもかかわらず、それが韓愈の書として信じるのはどのような理由によるものなのか、と疑問を投げかけている。言葉を補い解釋すれば、つまり、佛學嫌いの韓愈が一介の僧侶に書信をしたためたことを、宗旨を同じくする歐陽脩が敢えて信じるはずはないという物言いである。

しかし、實際に韓愈は高閑、元惠、文暢といった僧侶との交友も少なくなかつたのであり、歐陽脩が佛教を好まぬことにかこつけて、その書が僞作であると主張するのが筋ではないかと言わんばかりの趙明誠の決め付けには、話の論法において、いささか強引にすぎるとは思われる。

歐陽脩の排佛的思想に關して、『集古錄』跋尾卷四「神龜造

「碑像記」にも

患其文辭鄙淺，又多言浮屠，然獨其字書往往工妙。〈中略〉
然錄之以資廣覽也。

と見え、文章も卑俗で佛語が多いことに辟易するが、書が優れているので採録した理由を述べている。おそらく趙明誠はこの文を読んでいたことであろうし、歐陽脩のかかる思想との整合性を斟酌し、かく疑問を投げかけたのであろう。とはいえ、これも精密な考證を以って鳴る趙明誠にしては獨善に陥っており、筆を進めるうちに端なくも感情が表出されてしまったのかも知れない。

(四)

かく見てくると、趙明誠が時には公平な視點を失つてしまふ印象を受けざるを得えず、彼は自身の不條理は棚に上げる一方で、歐陽脩に對する眼には嚴しいものがある。

まずは、書法における隸書の意味の解釋をめぐり、趙明誠が自説を展開する用例を見ることにする。

「東魏大覺寺碑陰」(卷二二)について、題識に「銀青光祿
趙明誠『金石錄』の歐陽脩『集古錄』引用に見る撰述態度(大森)

大夫、臣韓毅隸書」とあり、隸書とは今の楷字であることと述べ、次の文獻をあげて立證する。

肩吾曰、隸書、今之正書也。

これについては『書品論』(『法書要錄』卷二)に、

始皇見而重之、以奏事繁多、篆字難制、遂作此法、故曰隸書、今時正書是也。

と見える。始皇は程邈の創作した文字を重んじて、當時上奏が繁多であり篆字を書くのに手間がかかったために、この書法を創ったことから、隸書と言ひ、これは今の正書すなわち楷書であるといふ⁹⁾。つづけて、次のように述べる。

張懷瓘六體書論亦云、隸書者、程邈造。字皆真正、亦曰眞書。

『六體書論』は、陳思『御覽書苑菁華』卷一二に見え、張彥遠『法書要錄』には目録に書名のみ記されている。この「眞書」

も同じく楷書を指す。以上の引用をふまえて、次のように自らの見解を述べる。

自唐以前、皆謂楷字爲隸、至歐陽公集古錄誤以八分爲隸書、自是舉世凡漢時石刻、皆目爲漢隸。有一士人力主此論、餘嘗出漢碑數本問之、何者爲隸。何者爲八分。蓋自不能分也。因覽此碑毅自題爲隸書、故聊誌之、以祛來者之惑。

唐代以前はみな楷字を隸書と稱したが、歐陽脩が『集古錄』に誤つて八分を隸書としてから、世の人はみな漢代の石刻であれば、みな漢隸と看做すようになってしまった。ある士人がこの論をつとめて支持していたので、私は漢碑を數本差し出して問うたところ、どれが隸書で、どれが八分であるか區別できない様子であった。この碑に揮毫者の韓毅が隸書と稱しているのだから、一目瞭然である。後學の戸惑いを拭おうとするために、これを書き留めたと述べる。

これに類する見解は、ほかの宋代の文獻にも見える。王應麟『玉海』卷四五「小學」に見えるものは趙明誠の言とほぼ同文である。¹⁰ また、陸游『老學庵筆記』卷十には、周越『書

苑』を引いて、

郭忠恕以爲小篆散而八分生、八分破而隸書出、隸書悖而行書作、行書狂而草書聖。以此知隸書乃今眞書。趙明誠謂誤以八分爲隸、自歐陽公始。

と言ひ、趙明誠の名を明記するところからすれば、かかる指摘はやはり『金石錄』より出たものと考えて差し支えないであろう。ほかにも、張邦基『墨莊漫錄』卷十や沈括『夢溪補筆談』卷二にも同様の主旨が述べられている。

客觀的に考證を進めるうえで、考證する側が如何に確たる基準をもっているか問われる場面も見られる。たとえば、唐杜濟墓誌（卷二八）の條では、書蹟の鑑定をめぐる客觀的な基準は何かを問うている。

この墓誌には顏眞卿の撰と記されるのみで、揮毫者については何ら言及されていないことについて、歐陽脩は、

非魯公不能爲也。蓋世頗以爲非顏氏書、更俟識者辨之。

と、顏眞卿の書であるとかかなりの確信を得ながらも、顏眞卿

の書でないとする大方の説を考慮して断定を避けている。一方、趙明誠はこの墓誌の字畫が奇偉あり、けつして他人が及ぶことのできるものではなく、顏眞卿のものであると主張する。歐陽脩が小字「麻姑仙壇記」について顏眞卿の眞蹟であると確信するにもかかわらず、この「唐杜濟墓誌」については何故に疑うのか、と疑問を投げかけている。

その小字「麻姑仙壇記」について、『集古録』跋尾卷七に次のようにある。

顏眞卿撰並書。或疑非魯公書、魯公喜書大字。餘家所藏顏氏碑最多、未嘗有小字者、惟干祿字書注最爲小字、而其體法與此記不同。蓋干祿之注持重舒和而不局蹙、此記迺峻緊結、尤爲精悍。此所以或者疑之也。餘初亦頗以爲惑、及把玩久之、筆畫巨細皆有法、愈看愈佳、然後知非魯公不能書也。故聊誌之、以釋疑者。治平元年二月六日書。

家藏の碑文のなかでも顏眞卿のものが最も多いが、顏眞卿は大字を書すことを好んでいたもので、いまだかつて小字を見たことがない。『干祿字書』注が最も小さいものであり、それ

趙明誠『金石錄』の歐陽脩『集古録』引用に見る撰述態度（大森）

が書の體勢においてこの「麻姑仙壇記」とは異なっていることが、顏眞卿の揮毫によるものではないと疑われる理由である。当初は顏眞卿のものではないと疑いもしたが、久しく賞玩するにつれて、筆畫の細いものから太いものまでみな法があり、見れば見るほど優れており、顏眞卿でなければ成しえないことを知る。

歐陽脩は揮毫者の推定にあたり、「唐杜濟墓誌」については疑問の餘地を残しながらも、「麻姑仙壇記」については断定する。そのいずれもが、いわば主觀的な彼自身の筆跡鑑定によって導き出された結果であり、そこからは明確な基準が見えない。このようなありかたに趙明誠は矛盾を感じたのである。

このような常に客觀的かつ正確を期する趙明誠の態度は、次の「學生題名」（卷二〇）の條にもよく示されている。その碑の揮毫者について、歐陽脩は漢の文翁の學生であるとするが、趙明誠はそれを誤りであると指摘する。

餘以字畫驗之、疑其爲晉以後人所立、然初無所據、未敢遂以爲然。其后以地理書參考、乃決知其非文翁學生也。

〈中略〉案晉書志〈中略〉四郡東西兩漢時皆未有、然則此

碑爲東晉以後人所立不疑矣。

書蹟の鑑定によれば、晉以降の人が立てたものであると疑うも、初めは根拠がないため、あえて断定しようとは思わなかったが、後に地理書を参照すると、それが文翁の學生によるものでないことがわかったと述べる。趙明誠も書蹟の鑑定にかなり精通していたと思われるが、そのみによつて確信を得るところまでには至らなかつたのであろう。文獻資料等によつて確たる證據がなければ、軽々しく判断を加えない慎重な態度が見られる。ゆえに、『晉書』志にもとづいて、漢代にはこの碑は存在せず、東晉以降に立てられた碑であることを證明するのである。

しかしながら、次の用例は上述の「學生題名」の條とは異なり、全くの趙明誠自身の主観的な書法觀にもとづいて判断が下されている。

柳宗元の撰並びに書になる「唐般舟和尚碑」について、『集古録』跋尾卷八に、

子厚所書碑世頗多有、書既非工、而字畫多不同、疑喜子厚者窃借其名以爲重。子厚與退之、皆以文章知名一時、

而後世稱爲韓柳者、蓋流俗之相傳也。

とあり、柳宗元の名を借りた僞作であるとしている。柳宗元を好むものが、韓柳と並び稱されるほどに名文家として世に知られる柳宗元の名聲を借りて、大切に扱われようとしたと言う。

一方、趙明誠は『金石錄』卷二九に次のように述べる。

子厚頗自矜其書、然亦不甚工、今見於世者、惟此與彌陀和尚碑爾、雖字畫大小不同、然筆法繁相似。歐陽公以爲不類、又疑他人借子厚之名者、非也。

柳宗元は書を自負しているが、それほど優れたものではなく、今見られるのはこの碑と「彌陀和尚碑」だけである。書は大小異なるが、筆法はまことに似ており、歐陽脩がそれを柳宗元の僞作であるとするのは、誤りであると指摘する。

博識の兩氏を以つてしても見解が分かれるのであるから、それだけに鑑定の難しさを物語る記述として興味深い。それは撰者および立碑年月の特定のみならず、文字の異同および解讀についても同様である。「簠銘」(卷二)の條には「張」

と「鉅」、「周姜敦銘」(卷一一)の條には「閭」と「百」、「漢封丘令王元賞碑」(卷一五)の條には「葉」と「丞」、「漢穀阮君神祠碑」(卷一七)の條には「畢」と「畢」のように兩氏の異なる見解が示されている。ただし、納得できるような説明はなく、その根據となるような理由までは示されない。

以上を見る限りにおいて、必ずしも趙明誠の書蹟の鑑定に對するスタンスが確立しているわけではないように見受けられるが、それは個々の場合に應じて臨機應變に對處するといふことなのだろう。對象に向き合い客觀的な方法によつて如何にその本質に迫つてゆくか、彼自身も苦悶していたであらうことは想像に難くない。それだけに他を見る眼差しも厳しといふ言わねばならない。

(五)

次に趙明誠が歐陽脩の及ばなかつた部分や誤りについて指摘している記述を具體的に見ることにする。

「漢敬使君碑」(卷十七)について、次のように述べる。

集古錄此碑凡再出、其一題敬仲碑、云名字已摩滅、獨首有敬仲字、故寓其名耳、疑其人姓田也。其一題無名碑、

趙明誠『金石錄』の歐陽脩『集古錄』引用に見る撰述態度(大森)

所載事皆同、蓋歐陽公未嘗見其額爾。

この碑が、『集古錄』に重複して記載されていると指摘する。一つは「敬仲碑」であり、もう一つは「無名碑」である。煩を厭わずこの二條を掲げ、碑文に關する同一の記載内容を下線で示すと次のようになる。

右漢敬仲碑者、其姓名字皆不可見、惟其初有敬仲二字尙可識、故以寓其名爾。蓋疑其人姓名田氏也。大抵文字摩滅、比其他漢碑尤甚、字可識者頗多、第不成文爾。惟云州郡課最、臨登大郡、又云居喪致哀、又云司隸從事、治書侍御史、又云光和四年閏月庚申、此數句粗可讀爾。其餘字畫完者、以漢隸今爲難得、錄之爾。治平元年閏五月二十九日書。

右漢無名碑、文字摩滅、其姓氏名字皆不可見、其僅可見者云州郡課最、臨登大郡、又云居喪致哀、曾參閔損、又曰辟司隸從事、拜治書侍御史、又曰奮乾剛之嚴威、揚哮虎之武節、又曰年六十三、光和四年閏月庚申遭疾而卒。其餘字畫尙完者多、但不能成文爾。夫好古之士所藏之物、

未必皆適世之用、惟其埋沒零落之餘、尤以爲可惜、此好古之僻也。治平元年六月五日書。

ともに『集古錄』跋尾卷三に見える記事であるが、これほど内容が重複しながらも、歐陽脩は同一の碑と氣づかずに異なるものと認識して、別々の條に記録してしまったのである。記載年月を見てもそれほど隔たっていないにもかかわらず、いつたいたどうしたことなのだろうか。さらに、文字の摩滅がひどく、姓名及び字の判讀がつかないことを言うが、趙明誠も碑自體の損傷が甚だしく、姓名の判讀がつかないことを認めるものの、その額題に「漢揚州刺史敬君之銘」と見え、歐陽脩がそれを見ていなかったことを指摘する。

そのほか、「唐滑臺新驛記」（卷二八）では、歐陽脩はその撰者が誰であるか分からなかったと言うが、碑に記されている文が『唐文粹』および舒元興の別集のなかに見えることを述べ、歐陽脩が目撃していなかったことを指摘する。

また、詩に關する誤った記憶についても言及される。「秦之梁山刻石」（卷一三）の條に『集古錄』を引いて、

麻溫故學士于登州海上得片木、有此文、豈杜甫所謂棗木

傳刻肥失眞者耶。

と述べる。おそらくは麻溫故學士が登州の海上で得た片木に、篆書の遺文とおぼしき「于久遠也、如後嗣焉、成功盛德。臣去疾、御史大夫臣德」の二十一字が書かれていたのであろう。ただし、杜甫の詩の引用について、趙明誠は、

蓋杜甫指嶧山碑、非此文明矣。

と誤りを指摘する。杜甫「李潮八分小篆歌」に「嶧山之碑野火焚、棗木傳刻肥失眞。」とあるのをふまえるのであるが、この詩が嶧山碑を指していることは明らかであり、どうやら歐陽脩はそれを誤認していたようである。

（六）

これまで趙明誠の見識によつて『集古錄』跋尾の獨斷附會の説を修正する記事を見てきたが、それを支えていたのは、東奔西走して金石遺文を蒐集かつ實見した彼の経験である。それゆえに、古物収集に對する強い執着は、學問において意識してやまない歐陽脩を比較の對象とせずにはいられなかつ

たように思われる。たとえば、「隋興國寺碑陰」の條に、

歐陽公嘗得啓法寺碑、列於集古錄中、而於太學官楊褒處見興國寺碑、以不得入錄爲恨。今碑陰又有襄州鎮副總管柳止戈以下十八人姓名、字畫尤完好、歐陽公所未見也。

とあり、碑陰に記された十八人の姓名が刻されているという新たに得られた知見を付け加え、歐陽脩が自ら収録できなかったことを口惜しく思った話まで載せる。

これについて、『集古錄』跋尾卷五「啓法寺碑」の條には、さらに詳しく述べられ、歐陽脩自身のあるがままの心のうちが語られている。それによれば、歐陽脩は太學官の楊褒のところでこの碑文を目撃していたが、實はその拓本を手に入れたくともその所在が分からなかったようである。つづけて、

不難得、則不足爲佳物、古人亦云、百不爲多、一不爲少者、正謂此也。

と言い、優れた物はいかに得がたいかをしみじみと感じ入った心情がこの數句に凝縮されていて、歐陽脩のコレクターと

趙明誠『金石錄』の歐陽脩『集古錄』引用に見る撰述態度（大森）

しての飽くことのない蒐集欲とともに、無念の思いが伝わってくる。

この事實を知った趙明誠はおそらく得意然とした氣分であつたであろうと想像される。それは歐陽脩が未見のものを自らは目撃し得たという優越感にほかならない。そこには、ある種の歐陽脩に對する對抗意識にも似た感情が宿つていたのかもしれない。それが逆の立場となると、「唐贈司空于復碑」（卷二九）に述べるがごとく、『集古錄』に存して『金石錄』にまだまだ収録されていないものについて尋ね求めようとする欲求に轉じられる。

そのほか、歐陽脩の目撃していない薛純隨の八分書「比干碑」を得たこと（「唐辨法師碑」卷二四）、「漢穀阮君神祠碑陰」が『集古錄』に記載されていないこと（「漢穀阮君神祠碑陰」卷七）などを逐一記す理由も、そのような感情の延長線上にあると考えてよいだろう。

しかし、歐陽脩の學問に對する敬意は、序文にも明らかにように少しも揺らぐものではない。そのことは、次の「谷口銅甬銘」（卷一二）の條によく示されている。

舊藏劉原父家、一器而再刻銘。始歐陽公集錄金石遺文、

自三代以來法書皆備、獨無西漢文字、求之累年不獲。會原父守長安、長安故都、多古物奇器、原父好奇博識、皆購求藏去、最後得斯器及行鏡、博山香爐、模其銘文以遺歐陽公、於是西漢之書始傳於世矣。蓋收藏古物、實始於原父、而集錄前代遺文、亦自文忠公發之、後來學者稍稍知搜抉奇古、皆二公之力也。

歐陽脩は三代以來の金石遺文の拓本はみな入手できなかった。しかし、前漢の文字については長年探し求めてきたが得ることができなかった。古物の考證を通じて歐陽脩のよき協力者でもあった劉敞が長安に地方長官として赴任したときに、多くの珍しい骨董を買い求めて收藏し、最後にこの谷口銅甬銘、行鏡、博山香爐を手に入れた。その銘文を寫しとって歐陽脩に贈ってから、前漢の書が世に傳えられるようになった。古物の收藏は劉敞より始まり、前代の遺文を集めて記録するのは歐陽脩より始まる。後學が珍しい骨董を捜し出すことを知るようになったのは、この二人の力であると、その功績を稱えている。

かく見てくると、趙明誠の歐陽脩に對する忌憚なき批評は、實事求是による學問的あり方に依據するものであることは改

めて言うまでもないが、それだけでは割り切れない、それは次元を異にする感情的なものも含まれていたのではないだろうか。『金石錄』序文には『集古錄』について、「其の尙お漏落有るを惜しむ」と言うにとどまり、それ以上の歐陽脩に對する批判めいた直接の言辭を見出すことはできない。しかし、彼に對する尊敬の念とは表裏をなし、時には對抗意識となり時には優越感となつて、抑えきれずに漏れ出た感情の片鱗が文中に見出させるのである。

(七)

上に述べたほかにも、次のような點についても補足して指摘しておきたい。

「瘞鶴銘」(卷三〇)「郭先生碑」(卷一九)の條などには、趙明誠が歐陽脩の記述に對し、それが何を根據としているのか疑問を投げかける部分が見られ、歐陽脩の記述を安易に信じてことなく引用資料の再検討を行つていたと思われる。「漢金鄉守長侯君碑」「秦鐘銘」の條などには、『集古錄』に引用された資料を追跡調査し、その是非を検討して、必要とあらば説明を補充する場面も隨所に見られる。ここに趙明誠の考證に對する基本姿勢がよく示されていると言えらる。

この考證の方法に關して、すでに述べたように『金石錄』は全般において金石遺文によつて史傳の誤りを訂正することを重要な方針としているが、逆に文獻資料によつて碑文の内容が訂正される場合も見られた。たとえば、『漢幽州刺史朱龜碑』（卷一八）に關して、朱龜なる人物について、『集古錄』には史傳には見えずこの碑に記されるのみであるというが、『金石錄』には『後漢書』西南夷傳、常璩『華陽國志』を引用して、碑文に記すところが實錄でないことを指摘する。このように歐陽脩の不足を補い新たに考證を加えるのであるが、必ずしも碑文の記述を確實な證據と看做して優先しているわけではないことがわかる。

以上『金石錄』における『集古錄』引用の状況より、趙明誠の撰述姿勢を考察してきたが、主觀を排した實事求是の學問的態度を掲げる趙氏にあつても、單なる考證の羅列に終わらず、時折、感情があらのままに示される場面も散見した。これは『集古錄』跋尾が思うに任せて自らの所感を綴つていくことも一脈通じるものがある。これは彼の意識することろであつたかどうかは明白ではないが、かかる筆致を可能ならしめたのも、やはり跋尾という様式を確立させた歐陽脩の功績にあずかるところが大きいことは確かであろう。

趙明誠『金石錄』の歐陽脩『集古錄』引用に見る撰述態度（大森）

注

- (1) 清の王士禛『池北偶談』には『金石錄』を明誠とその妻の李清照の共著であるとするが、李清照が記した後序によれば、趙明誠の撰であるという。
- (2) 金文明『趙明誠和他的金石錄』（『金石錄校證』廣西師範大學出版社・二〇〇五年）。
- (3) 『晦菴先生朱文公文集』卷七五「家藏石刻序」に「予少好古金石文字、家貧不能有其書、獨時時取歐陽子所集錄、觀其序跋辨證之辭以爲樂。遇適意時、恍然若手摩挲其金石而目了其文字也。既又悵然、自恨身貧賤、居處屏遠、弗能盡致所欲得如公之爲者、或寢食不怡竟日」とある。
- (4) 李清照『金石錄』後序に「每朔望謁告出、質衣取半千錢、步入相國寺、市碑文、果實歸、相對展玩咀嚼、自謂葛天氏。《中略》得書畫、彝鼎、亦摩玩舒卷、指摘疵病、夜盡一燭爲率」とある。
- (5) 『歐文集』筆說「夏日學書說」に「字未至於工、尙已如此、使其樂之不厭、未有不至於工者。使其遂至於工、可以樂而不厭、不必取悅當時之人、垂名於後世、要於自適而已」とある。
- (6) 王國維『觀堂集林』卷六「宋代金文著表序」を参照。
- (7) 附編第一章「歐陽修か歐陽脩か」三七頁（小林義廣『歐陽脩 その生涯と宗族』二〇〇〇年・創文社）を参照。
- (8) 『陳書』卷七張貴妃傳に「後主張貴妃名麗華、兵家女也。家貧、父兄以織席爲事。後主爲太子、以選入宮。是時麗貴嬪爲良娣、貴妃年十歲、爲之給使、後主見而說焉、因得幸、遂有娠、

生太子深。後主即位、拜爲貴妃、性聰惠、甚被寵遇、後主每引貴妃與賓客遊宴、貴妃薦諸宮女預焉、後宮等咸德之、競言貴妃之善、由是愛傾後宮、又好厭魅之術、假鬼道以惑後主、置淫祀於宮中、聚諸妖巫使之鼓舞、因參訪外事、人間有一言一事、妃必先知之、以白後主、由是益重妃、內外宗族、多被引用。及隋軍陷臺城、妃與後主俱入于井、隋軍出之、晉王廣命斬貴妃、於青溪中橋」とある。

(9) 裘錫圭『文字學概論』(商務印書館・一九九〇年)七九頁參照。なお、本書の翻譯として早稻田大學中國古籍文化研究所・文字學研究班譯『文字學概要——前編』漢字の誕生とその發展——がある。

(10) 『墨莊漫錄』卷十に「章子厚論書雜書」。「近世有荒唐士人妄謂爲隸書、而不知隸書乃今正書耳。世俗亦往往從而謂之隸書、且相尙學焉、不知彼將以何等爲古八分、又將以今正書爲何等耶」とあり、『夢溪補筆談』卷二「今世俗謂之隸書者、只是古人之八分書、謂初從篆文變隸、尙有二分篆法、故謂之八分書。後乃全變爲隸書、即今之正書、章草、行書、草書皆是也。後之人乃誤謂古八分書爲隸書、以今時書爲正書、殊不知所謂正書者、隸書之正者耳。其餘行書、草書、皆隸書也。杜甫李潮八分小篆歌云、陳倉石鼓文已訛、大小二篆生八分。苦縣光和尙骨立、書貴瘦硬方通神。苦縣、老子朱龜碑也。書評云、漢、魏牌榜碑文和華山碑、皆今所謂隸書也。杜甫詩亦只謂之八分。又書評云、漢、魏牌榜碑文、非篆即八分、未嘗用隸書。知漢、魏碑文、皆八分、非隸書也」とある。